

医療維新

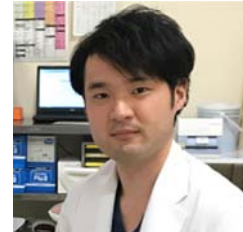
シリーズ 「医学部卒業後10-15年目の医師たち」～JCHO編～

医療維新

研修医2年目、目標は「ハイブリッド脳神経外科医」

将来的は故郷の患者を救う医師に

オピニオン 2019年2月15日(金)配信 JCHO徳山中央病院 研修医 殖木 洋平

殖木 洋平 Yohei Fueki
JCHO徳山中央病院 研修医2年目

【略歴】山口県長門市出身。2017年3月山口大学医学部医学科卒業。卒後より初期研修医として徳山中央病院に勤務。現在2年目。初期研修1年目の経験から脳神経外科医を目指す。

私の父親が病院薬剤師ということもあり、幼い頃から病院内の職業や体の仕組みについて興味があったように思います。医師を目指す一番のきっかけになったのは、小学5年生の時に遊んでいて転倒し、右腕を骨折したことです。スポーツが大好きだった私にとって1カ月間の治療生活は思った以上に苦痛で、健康に生活できることの喜びを幼いながら痛感しました。病气や怪我で苦しんでいる患者さんに寄り添い、治してくれる「お医者さん」という職業がとても格好良く感じ、私も医師になろうと思ったのが最初のきっかけです。

医師を目指す過程で一番うれしかったことは、大学入試で医学部医学科に受かったことでしょうか。小さい頃から医師になりたいと思い続けていましたが高校時代はあまり頭が良い方ではなく、現役時代の受験は失敗。両親に頼み込み、1年間だけ浪人させてもらえる約束をしました。「絶対に1年間だけ。多浪は許さない」。これが父親から出された浪人する上での条件でした。焦って必死に勉強したことを覚えています。すぐに成績が上がるわけでもなく、「医学部に受かるだろうか……、このまま夢を諦めるしかないのか……」と悩むこともありましたが、でもやっぱり医師以外の仕事をしている自分の姿をイメージすることができず、医師になりたい一心でひたすら勉強していました。

そして山口大学医学部医学科にギリギリ入学。今までの人生の中で一番うれしかった出来事です。合格後にたまたまテレビで放映されていた医療系のドラマを見た時、「俺も医者になれるのか～！手術できるのか～！」と泣きそうになったのをよく覚えています。医学生時代も試験勉強や病院実習、国家試験の勉強など大変なことは多くありましたが、友達と楽しく乗り越えることができ、そこまで苦痛に感じたことはありませんでした。

私が現在勤務しているのは山口県周南市にあるJCHO徳山中央病院です。病床数は519床、年間救急車受け入れ台数4500件以上、年間手術件数3000症例以上あり、山口県東部の中核病院として機能しています。初期研修医は1年目19人、2年目16人の計35人が在籍しており、切磋琢磨しながら日々の診療にあたっています。

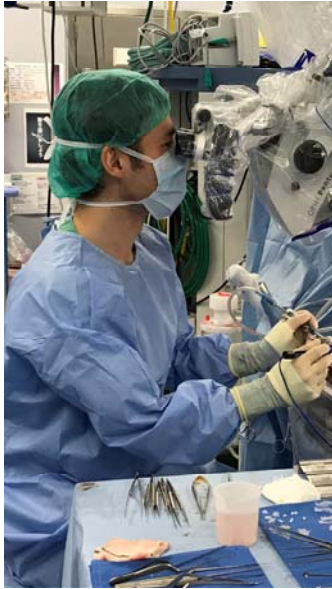
「山口県内で研修するなら第一希望は徳山中央病院で」と、大学4年生ぐらいの時から考えていました。見学などを通じて感じた病院スタッフの明るい雰囲気や、研修医同士の仲が非常に良いというのもポイントですが、一番の理由は救急車対応や救急外来対応能力が県内で一番身に付くと感じたからです。

当院の当直は初期研修医1年目、2年目が1人ずつ、22時までの副直の後期研修医が1人、内科当直、外科当直の上級医が1人ずつの計5人体制で行っています。救急車搬送件数は1日平均10件、walk inは約38人です。3次救急指定病院ですので、心筋梗塞や脳卒中など早急な治療介入が必要な患者さんも多く搬送されます。First touchは初期研修医が行い、必要な検査や薬剤の投与を上級医に相談して実施し、専門医へと引き継ぐon the job trainingを日々こなしています。

救急車対応も行いながらwalk inの患者さんの対応も行いますので、当直は寝られないほど忙しい日がほとんどです。当直明けの朝には救急モーニングカンファレンスが行われ、救急車搬送症例、walk in入院症例を救急科、総合診療科、研修医の前でプレゼンテーションします。症例を簡潔にプレゼンする能力も身に付きますし、何より自分の診断・治療が妥当であったか評価してもらえるので非常に勉強になります。

重症くも膜下出血の症例経験が契機

初期研修1年目で脳卒中救急対応や脳神経外科の手術に非常に興味を持ったので、脳神経外科医になると決めました。印象に残っているのは若い女性のくも



膜下出血の症例です。重症くも膜下出血で危険な状態でしたが、スピーディかつ丁寧にクリッピング術が行われ、1カ月後には元気に歩いて帰っていく患者を見たときは衝撃を受けました。私の地元である山口県長門市には常勤の脳神経外科専門医がおらず、将来的には自分の手で故郷の脳神経外科疾患の患者を救いたいという気持ちも僕の背中を押してくれました。当院の研修プログラムの2年目は自由選択期間が長いので、8カ月間ほど脳神経外科をローテートしています。現在も脳神経外科医、脳卒中内科医、神経内科医の先生にご指導いただきながら神経救急患者への初期対応をメインに勉強しています。

手術症例では術前の身体所見、画像所見、鑑別疾患、手術法、術後管理などについて指導医から口頭試問を受け、ディスカッションを行いながら治療を進めていきます。慢性硬膜下血腫の手術やLPシャント術では体位取りやマーキングを行い、指導医の監督下で執刀します。もちろんまごついたり、手技に不安が見られたりすれば即「取り上げ」です。最近では慢性硬膜下血腫の手術を完刀できるようになりました。脳神経外科医として少しずつ成長しているような気がする今日この頃です。勉強量が多く指導医に褒められるより怒られることが圧倒的に多いですが、非常に楽しく充実した日々を送っています。

将来は、脳神経外科医の中でも脳血管障害を専門にしたいと考えています。脳神経外科専門医と血管内治療専門医を取得して、直達術も血管内治療も両方行える「Hybrid neurosurgeon」になることが最大の目標です。そしていつかは地元に戻り、山口県山陰地方の脳神経疾患に対して早期治療介入できるようになりたいです。できればずっと臨床の現場で頑張りたいですね。

遊べる時に遊んでおけ

これから、そして今まさに医師を目指す高校生には、とにかく自分が最も合格しやすい大学を見付け、自己分析し受験勉強を頑張してほしいです。「最も合格しやすい大学」とは、「自分の得意科目で勝負できる大学」などでしょうか。もちろん推薦入試を受けることができるのであれば、積極的に受けるべきです。1回でも多く受験のチャンスを増やしてください。ただ、高校3年間という貴重な青春の日々を勉強一辺倒になってしまうのも残念なので、自分のやりたいことを精一杯やってみることも大切だと思います。医学生には「遊べる時に遊んでおけ！」と声を大にして言いたいですね(笑)。僕が学生時代の時には夏は野外音楽フェス、冬はスノーボード三昧と暇さえあれば遊んでいました。そして初期研修はぜひ徳山中央病院で！忙しいですが、充実した研修医生活をお約束します！

シリーズ [「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～](#) »